

滋賀医科大学 学長

吉川  
隆一

### 本当に学びたいことを求めて 試行錯誤した学生時代

**学長** 本日は武村正義先生にお越しいただき、「地域が求める大学像」というテーマでお話をうかがいたいと思います。

まず、武村先生ご自身の学生時代について、大学に進まれた経緯なども含めてお話しいただけますか。長い学生生活を過ごされたということですが、現在の学生にも参考になる点があると思います。

**武村** 私の学生時代というのは「ほろ苦い」の一言に尽きます。私は8年間大学に在籍して、その間転学と学士入學で2つの学部と1つの研究所を卒業しました。不経済で、非効率なことをしたわけですから褒められたことではありませんが、「さまざま青春」とも言えますが、人生においてさまざまが許された時期であったという見方もできます。10代の後半から20代の初めに、大いに悩み、さまざま、試行錯誤をすることが将来の糧になると言えるかもしれません。

**学長** 3つのコースを修了されたということですが、1つ目を卒業された時にそこで満足できずに、もっと学びたいという気持ちを持たれたのでしょうか。

**武村** 最初に教育学部を卒業した時、これでは不十分だという気持ちがあったのと、他の学部の魅力を感じたということもありました。そして、2つ目の新聞研究所を卒業した後、さらに経済を学びたいと経済学部へ進みました。



村山 典久  
滋賀医科大学理事

**学長** 医学部は6年間の課程で、1、2年で一般教養を学んだ後専門医学教育が始まります。滋賀医科大学では、2年生後期からの学士編入制度を設けて、他の学部へ入学した生徒でも、医学の道へ進みたいということになれば、そこでチャンスをつかめるようになります。

# 法人化をむかえた 滋賀医科大学

## 地域が求める大学像

元滋賀県知事・元大蔵大臣

# 武村 正義





**武村** それは最近の傾向なのでしょう。さまざま青春を認めてそういう道を開かれたというわけですね。

**学長** 18歳とか19歳で二生の道を正しく選択できるのかということが問われる中で、一旦別の道を選んだがやはり医学の道に進みたいという若者に門戸を開きたいということとで取り組んでいます。10名の定員に対して数十倍の倍率になりますが、学士入学制度で編入してきた学生は、総じて優秀で非常に熱心に勉強しています。

**武村** 迷いながら方向を変えられることもできるよう、医学部にもそういう門戸が開かれているというのはいいことですね。

**学長** 逆もあります。医学部に入学したが、どうしても自分には向いていないと感じたら、望んでいない医師になるより、自分が本当に望む道に変えてもらったほうがいいと思います。

**武村** 17、8歳で将来を決めるといのは、本人の主体的な決定なのでしょう。それとも保護者や教師からの影響が強く働いているということでしょうか。

**学長** 偏差値によるところが大きいです。予備校が出している情報をもとに進路指導をされるのがほとんどで、この偏差値ならこの大学のこの学部というように決められて、偏差値で輪切りにされた成績で入学してきます。

**武村** 自ら医学部を志望している生徒は当然ですが、自分ほどの学部へ行くかという判断は本人の意志によるものでしょうか。

**学長** 本来は医師になりたいという明確な意識を持って入学してくるべきですが、親が医師だから医学部へ進むという傾向も多いですね。そう



いう意味で、今の進路指導が必ずしも充分でないかもしれないという疑問はあります。

**村山** 私自身も大学を卒業する時どこに就職すればいいか迷いました。工学部を卒業しましたが、その時にもう少し世の中を見てみたいとコンサルティング会社に入社しました。コンサルティン

グ会社なら、いろいろな企業と接して、さまざまな業界のことがわかると考えたからです。

### 一定の経営責任を認めつつ 基礎研究分野には国のサポートを

**学長** 大学の役割について、知を育成する研究の場であるとか、人材を育てる場であるとか、社会に貢献するための知識を還元すべきであるとか、いろいろなことが言われていますが、武村先生のご経験から、大学とは社会にとつてどのような存在であるべきだと思われませんか。

**武村** 大学というところは若い人の殿堂であり、つねに明るいプラスイメージがあつて、あまり世俗化して欲しくないという思いがあります。一方で、帝国大学から始まる日本の大学の歴史を見ると、研究を重視するあまり象牙の塔的な印象も少なからずあります。

世の中はつねに動き変化していくものですから、世俗的であつてはいけないと言つても、時の流れに従順であらざるを得ないし、それが今回の法人化であるのかと思えます。これに対する是非の議論はもう過ぎてしまったことですが、振り返ると橋本内閣の決断によるもので、私も政権党の党主として了解しましたが、十分に議論がで

きていかなかったのではないかと責任を感じています。

各大学の学長を中心に大学経営において主体性を持つというのは、見方によっては悪いことではありませんが、一定の範囲内での自己責任、経営ということにしないと、民間のように100%自己責任を負うことになると、システムが崩壊する恐れがあります。

**学長** 将来的に民営化までいくことを視野に入れた政策になるのではないかと危惧しています。国から高等教育に支出される費用は、GDP比で見ると0.5%と先進国の中で日本はとても低いのです。今後、国が高等教育にどの程度関与すべきか、どの程度責任を果たすべきか、そのあたりについてはどう思われますか。

**武村** 教育のほうは必ずしも国立でなくてもいいと思いますが、基礎研究については国立大学が果たす役割は大きく、損得ぬきで時間をかけて取り組まねばならない基





基礎研究分野については、経営論理だけが働く組織では無理だと思えます。国が高等教育をどう認識するかですが、予算の厳しい中で科学技術予算は毎年増えています。日本の将来を考えると、ベーシックな研究分野に対しては、これからも国家的なサポート、税による支援が必要だと考えます。

私は西ドイツに1年半留学していましたが、当時西ドイツの大学はすべて国立で、ゆとりのある大らかな雰囲気でした。アメリカでも州立の大学がずいぶん活躍しています。少なくとも日本の国立大学は法人化して一定の経営責任を認めても、民営化、私学化するのはいかがでしょうかと思います。

しかし、日本の財政環境が大変心配です。ずっと先送りしてきた財政赤字が雪だるまのようにふくれあがつて巨大化して、それがあらゆる分野に影響しています。財政から吹く北風はますます厳しくなるを得ません。

村山 4月に滋賀医大にまいりまして、臨床、基礎医学とも財政的に大変苦しい中で、教員のみなさんが研究を続けていることを実感しました。その中で大学をどう運

営していくかを今考えているところですか。

武村 国からの大学への助成は増えているのですか。

学長 増えています。一部のトップクラスの世界的な研究に予算が集中する偏りがみられま

す。それ以外では減っているところが多く、格差がどんどん開いています。今まだ目立った成果がなくても、将来大切な結果が出るような研究に予算がなく、苦しい状態にあるといえます。

### 国立大学法人の使命を明確化し ポリシーを持った運営をめざす

学長 大学として法人化にどのように対応していけばよいか、なにかご意見を聞かせていただけますか。

武村 具体的な意見を申し上げる立場ではありませんが、一般論であれば一定の経営の主体性を発揮されるのは悪くないことですが、財政運営の基本は当たり前前のことですが「入るをはかつて、出づるを制す」ということになります。これは国の財政の運営の基本でもあるわけですが、収入を増やす努力をし、支出を極力抑えるということとです。

学長 このたび村山を理事に迎えましたのは、これまで予算獲得には熱心でしたが、出る点については国立の施設はあまり考えてこなかったのですが、それを民間の視点で見直してもらったためです。

武村 入るほうの工夫も問われるではありませんか。

学長 特に附属病院を抱えている大学は、2%という経営効率化係数が課せられましたので、毎年2%の収入増

を図っていかねばなりません。国有財産で運営されるわけですから、与えられた施設を十分活用しながら、効率的な運営をしていくために医師も職員もがんばっています。結果として、効率化が進んでいるかは専門家による判断が必要ですが、法人化をどう受け止めればいいのか、初めてのことですので不透明な部分が多いのは確かです。

武村 収入が増えれば当然支出も増えるが、収入が増えなければ支出をがまんすればいい——そういった選択肢がないと、すべて一律に2%成長となると各大学の主体性というのは発揮できないのではないのでしょうか。年金も2%で議論されていますが、経済は成長し続けるという神話をはびこっているように思います。

学長 かつての国立大学協会が社団法人として生まれ変わりましたが、そこで専門的に国立大学法人の使命や経営基盤を研究するプロジェクトを立ち上げて、政策や政府の改革に注文をつけたり、要望していくための根拠づ





くりに取り組んでいま  
す。予算が厳しい中  
で、今のような経営  
改善や効率化の係数  
を排除しにくいところ  
に追い込まれています  
が、しっかりとしたポリ  
シーを持つことが必要  
だと思えます。

**武村** 大学として政治的発言を行うことは自由にできる  
のですか。

**学長** みなし公務員という身分でして、今までと同じ活  
動制限があつて行えないのですが、政策に対して声をあげ  
ていかなければならないと考えています。

**武村** 時と場合によっては政策に対して堂々とももの言  
えるような仕組みが必要です。

**学長** 身を守るためにある程度活動しないといけないとい  
うことで、昨年暮れに全国の国立大学の学長が一斉に

地元選出の国会議員に事情を説明して、国の方針に異  
論を唱えるという行動を起しました。

### 産官学連携を視野に入れ 地域の信頼に応える

**学長** 滋賀医科大学も今年で創設30年を迎えることに  
なりますが、法人化した本学への要望やこういう大学に  
なつてほしいといった期待などがありましたらお聞かせい  
ただけますか。

**武村** 昭和49年の創設ということで、私が県政をあずかつ  
た時に誕生した大学でしたから、ずっと遠くから成長を  
見守ってきましたが、ずいぶん滋賀県民の中に浸透し定  
着してきたと評価しています。私自身も、私の家族縁者  
がお世話になっていきますし、たいへん身近な病院になつた  
という印象を持っています。

また、当然オープンな大学として全国から優秀な学生  
が集まつて来ることでしょうし、県内で唯一の国立大学法



人の大学、病院というプライド  
を持つて、大いにご苦労してい  
たかと思うと思います。

いつか外科の谷先生からご相  
談を受けたことがあります、  
それは産官学に近い1つの発想  
で、県内の企業にも目を向けて  
もらいたいということ、ある提  
案をされていました。産官学連  
携ということがよく言われます  
が、行政、産業とのかかわり、  
地域社会との共存、連携とい  
ったことにも取り組んでいただ  
いてほしいと思います。滋賀県とい  
う地域の中で、法人として今後  
ますます期待される大学に育つ  
てほしいと願っています。

**学長** いろいろ貴重なご発言をいただきまして、ありが  
うございました。ご要望いただいたことに応えることがで  
きるよう、より地域密着型を強めて、今後さらに県民に  
喜ばれ、信頼される大学をめざしてやっていきたいと思  
います。

◎ 本日はお忙しい中、本当にありがとうございました。



### 武村正義氏プロフィール

1934年滋賀県八日市市生まれ。'58年東京大学教育学部、'60年同新聞研究所卒業。'62年同経済学部卒業後、自治省（現総務省）に入省。西ドイツ留学、愛知県と埼玉県へ出向勤務を経て、'71年滋賀県八日市市長に当選、'74年には全国最年少の40歳で滋賀県知事に当選。'86年衆議院議員に初当選、その後'93年に新党さきがけを結成。細川連立内閣では内閣官房長官に、村山内閣では大蔵大臣に就任。現在、滋賀県地方自治研究センター長、徳島文理大学大学院教授として活躍。